

イエナ・プランの学校改革過程に関する一考察

— 1924-1950年のイエナ・プランの展開に焦点をあてて —

安藤和久

(2021年10月5日受理)

A Study of the Jena-Plan's School Reform Process:
Focusing on Development of the Jena-Plan in 1924-1950

Kazuhisa Ando

Abstract: The purpose of this study is to describe the 26-year(1924-1950) process of the Jena-plan by focusing on the character of the Jena University School as an experimental school, and to clarify a new image of the Jena-plan in response to the discourse that it was stagnation after the 1930. Petersen's attempt at the school reform, which began in 1924 and ended in 1950, experienced three different political regimes: the Weimar period(1924-1933), the Nazi period(1933-1945), and the Soviet occupation /German Democratic Republic period(1945-1950). Therefore, the Jena-plan has been understood by each time periods by the political system of the time. After 1930, the Jena-plan played an important role as an experimental school, both outside the Jena University School in its expansion to various schools, and inside the Jena University School in its pedagogical factual research(pädagogische Tatsachenforschung). Furthermore, it became clear that the faculty organization of the Jena University School did not continue to be transformed, but that attempts to reform the school based on pedagogical factual research continued.

Key words: Jena-Plan, Peter Petersen, School Reform

キーワード: イエナ・プラン, ペーター・ペーターゼン, 学校改革

I. はじめに

イエナ大学附属学校においてペーターゼン (P. Petersen, 1984-1952) が1924年から取り組んだ学校改革は、その成果が1927年の国際新教育連盟 (International New Education Fellowship) 第4回国際大会において発表されることで「イエナ・プラン」として認知されるようになった。同校にはドイツ内外から訪問者が訪れ、ペーターゼンもドイツ外に繰り出し、アメリカでイエナ・プランに基づく実験学級を作るなど、イエナ・プランは国際的な広がりをみせた¹。しかしながら、

同校での改革は、第二次世界大戦後のソビエト占領時代に、ペーターゼンの公職追放と同校の閉鎖によって1950年に幕を閉じることになる。イエナ・プラン誕生からおよそ一世紀を経た今日、イエナ・プランはオランダを中心に大きな広がりをみせている。オランダで生じたイエナプラン運動 (Jenaplanbewegung)²は今日では日本にも波及しており、2019年には長野県に日本初のイエナプランスクールが開校されている。この運動は、ペーターゼンの改革を「古い」イエナ・プランとし、それとは非連続な側面を有する「新しい」イエナプランを提起している一方で、異年齢集団の組織や時間割の再編といった教授組織は継承されている。

イエナ・プランに関しては、その教授組織に対する

本論文は査読付き論文である。

教育方法学の立場からの研究³や、ペーターゼンの教育思想からその基盤となっている理論を読み解こうとする研究⁴がなされてきた。しかしながら、その特徴的な教授組織に注目が集まる一方で、イエナ大学附属学校での学校改革の試みがどのような過程を経たのかを明らかにする研究は、後述のSchwan (2018)があるものの、十分にはなされてこなかった⁵。

1924年から取り組まれ、1950年に幕を閉じるペーターゼンの学校改革の試みは、ヴァイマル期 (1924-1933年)、ナチス期 (1933-1945年)、ソビエト占領/ドイツ民主共和国期 (1945-1950年) という異なる3つの政治体制を経験することとなる。それゆえにイエナ・プランはその時々の政治体制での時期区分による理解がなされてきた⁶。さらに、Schwan (2018) はペーターゼンによるイエナ・プランに関する記述から1930年以降のイエナ・プランの改革における停滞期を論じている⁷。しかしながら、イエナ大学附属学校での改革の取組が、他の諸学校の改革を志向しており、実際に他の学校に影響を与えていたことを考慮するならば、イエナ大学附属学校の組織的革新がなかったことでもって、イエナ・プランの改革過程の停滞と見なすことは一面的な見方なのではないだろうか。むしろ、イエナ・プランを諸学校を改革する試みと捉えることによって、時期ごとの改革の特徴が見えてくるのである。そこで、本稿ではイエナ大学附属学校の実験学校としての性格に着目することで、イエナ・プランのおよそ26年間の過程を描き直し、1930年代以降は停滞していたとする言説に対する新たなイエナ・プラン像を明らかにすることを目的とする。

II. 諸学校の改革としてのイエナ・プラン

II-1. 政治体制に基づく時期区分によるイエナ・プラン理解

2012年に刊行された『ペーター・ペーターゼンとイエナプラン教育学 (Peter Petersen und die Jenaplan-Pädagogik)』は、従来のペーターゼンとイエナ・プランに関する研究をまとめ、その上でアーカイブ調査などの成果を踏まえ、ペーターゼンのイエナ大学での活動と附属学校での実践を中心に、新たな研究成果を提示している⁸。同書に収められている論文は2010年11月にイエナで開催されたワークショップをもとにしており、延べ10人の著者による10本の論文が挙げられている。同書は第一部「ヴァイマル時代 (Weimar Zeit)」、第二部「国家社会主義時代 (NS-Zeit)」、第三部「1945-1991年」という時代区分のもとで構成さ

れており、1924年のイエナ大学附属学校での学校改革の開始から、1991年のイエナでのイエナプラン・シューレの誕生までを包括的に論じている研究書として今日においても注目に値する⁹。

第一部では「ヴァイマル時代」をペーターゼンとイエナ・プランの全体的な仕事の創設期 (Gründerzeit) と位置づけ、1923年のペーターゼンのイエナ大学着任からヴァイマル共和国が終わりを迎えるまでを取り扱っている¹⁰。イエナ大学附属学校と並んで、教師教育 (Lehrerbildung) や教育科学研究所 (Erziehungswissenschaftliche Anstalt) がペーターゼンの活動領域として論じられることで新たなペーターゼン像が描き出されたり¹¹、学校の実践の記録からイエナ・プランは民主的な学校モデル足り得るのかという疑念¹²に対する反証が行われたり¹³、従来の研究に対する新たな見解が提出されている。第二部において、Harten (2012) は、ペーターゼンが戦略的に国家社会主義的な教育科学者になったことと、イエナプラン教育学とそれに関連する教育科学研究所が国家社会主義下でも本質的な変化はなかったことを対比することで、問題があったのはイエナプラン教育学ではなく、第三帝国における大学教師としての役割であったと結論づけている¹⁴。さらに、Retter (2012) は1933年以降にもナチス支配に対抗するユダヤ人や社会主義者、共産主義者の親の子どもたちがイエナ大学附属学校に通っており、イエナ大学附属学校が独自の世界を保っていたことを明らかにしている¹⁵。第二部の論考では、両者ともにペーターゼンの政治的行動とイエナ大学附属学校での実践を直接的には結びつけない見解を提示している。第三部では、教育学の新たな始まり (pädagogischer Neubeginn) に期待を寄せていながらも東ドイツにも西ドイツにも足場を築くことができなかったペーターゼンの1945年の終戦から1952年の死去までの様相¹⁶やペーターゼン没後のペーターゼン受容¹⁷、イエナプランルネサンス (Jenaplan-Renaissance) の中で1991年のイエナプランシューレの誕生¹⁸が取り扱われている。

同書はペーターゼンとイエナ大学附属学校でのイエナ・プランが当時の教員養成や政治的闘争の中でどのような位置づけにあったのかを論じており、とりわけレッターによる指摘は、創始者ペーターゼンに対する批判的なまなざしの中でも独立して主張され得るイエナ大学附属学校の意義を示している点で有意義である。また、イエナ大学附属学校閉鎖後のイエナにおけるイエナ・プラン復活までが描かれていることが、イエナにとってイエナ・プランとペーターゼンの遺産がどのような意味を持つかを示唆している¹⁹。しかしな

がら、ペーターゼンがイエナ大学附属学校で取り組んだ学校改革の試みに着目し、その学校改革の発展と展開を考慮した時期区分ではないことが留意されなければならない。

II-2. 実験学校としてのイエナ大学附属学校

それでは1924-1950年の26年間でイエナ・プランはどのような改革過程を経たのであろうか。Schwan (2018) はペーターゼンのイエナ・プランに関する著作の内容比較から、「実験段階が1925年初頭から始められ、そして1930年の「現実主義的転換」の間に終わられた」と述べ、1930年以降のイエナ・プランの改革における停滞を論じている²⁰。確かに1927年にはその改革の成果が国際大会で発表されることで「イエナ・プラン」として有名になるが、その際には学校居間 (Schulwohnstube) や子どもの作業と生活に合わせた時間割再編という組織的基盤がすでに整えられていることがわかる²¹。

しかしながら、イエナ大学附属学校での組織的変革が見られないことでもって、そしてイエナ・プランに関するペーターゼンの記述が更新されないことでもって、イエナ・プランの「改革」が停滞していたと結論づけることはできるのだろうか。この疑問はペーターゼンがイエナ大学附属学校での改革の試みについて述べている以下の言葉から浮かび上がってくる。すなわち、「それ (イエナ・プラン—註：引用者) は決してこの学校種に結び付けられているのではなく、ただ教育的理念が全ての教育学的行為を統率しその最も純粋な表現を求めて自由に奮闘することができるという条件のもとでだけいずれの学校においても実現されるようになり得る」²²というのである。ここからは、イエナ・プランと呼ばれる学校改革の試みが、初めからイエナ大学附属学校のみで行われることを企図していたわけではなかったということが読み取れる。

さらに、「1929年以降イエナ以外のあらゆる種類の国家学校においても次第に数多く十分に試されることが可能となった」²³ということからも、1924-1929年の大学附属学校の改革は後の他の学校に改革が展開していくための出発モデルを整えることが意識されていたことがわかる。すなわち、1930年以降のペーターゼンの試みはイエナ大学附属学校内の改革というよりもむしろ、諸学校の改革として進展していたとみることができ。さらに、1930年以降はイエナ大学附属学校内でも教育学的事実研究が活発に行われた時期であり、この点でもイエナ・プランの停滞期であるとは言い難い。イエナ・プランの改革過程は、それが諸学校を改革していく試みとしてどのように進展していったのかという、学校改革の変遷に則して検討される必要がある。

III. イエナ・プランによる学校改革の特徴

ここでは、イエナ・プランによるイエナ大学附属学校のおよそ26年間の学校改革の過程を捉えたい。そのため、主にペーターゼンの著作やイエナ・プランに関する先行研究を手がかりとしながら、1924-1950年のイエナ大学附属学校における出来事を一覧にした (表1)。表1を手がかりとしながら、イエナ大学附属学校の改革過程を、1924-1929年の創設期、1930-1944年の拡充/展開期、1945-1950年の閉鎖期として区分し、その時期ごとの特徴を明確にした。

III-1. 創設期：出発形式としてのイエナ大学附属学校の整備

イエナ大学附属学校での学校改革は1924年に4年制基礎学校として始まった。1924年時点では校長を務めたペーターゼン以外には、1人の教師ヴォルフ (Hans Wolff) と21人の生徒による単級の学校であった。翌1925年には3つの基幹グループ (Stammgruppe) による8年制学校となったイエナ大学附属学校は、4-6年生を担当するフェルチュ (Arno Förtsch) と7-8年生を担当するライグバート (Robert Reigbert) を教師として迎え、1926年3月には69名の生徒が3つの基幹グループ (Stammgruppe) に在籍していた²⁴。1926年には10年制学校へと拡大することには失敗したものの、名称をイエナ大学附属学校 (Universitätsschule Jena) に変更し、早期から改革を進めた²⁵。

この改革の取組は初年度の実践報告である『作業-生活共同体学校の原則に応じた基礎学校 (Eine Grundschule nach den Grundsätzen der Arbeits- und Lebensgemeinschaftschule)』(1925年)などの著作を通して公開されていた。のちには全3巻からなる大イエナ・プランの第1巻『新教育の原則に応じた自由で一般的な国民学校の学校生活と授業 (Schulleben und Unterricht einer freien allgemeinen Volksschule nach den Grundsätzen neuer Erziehung)』(1930年)、第2巻『1925-1930年のイエナ大学附属学校の学校実験の中で創作された作品 (Das gestaltende Schaffen im Schulversuche der Jenaer Universitätsschule 1925-1930)』(1930年)が刊行されており、当時の実践を知ることができる。また著作による成果の公開だけではなく、「教育学週間 (Pädagogische Woche)」によって実践を公開することでも、イエナ大学附属学校の試みは公開性を担保していた²⁶。イエナ大学附属学校での実践を公開する理由について、ペーターゼンは『作業-生活共同体学校の原則に応じた基礎学校』の中で、

「私たちがこの年次報告書を不十分さも率直に示す形で発行した中心的理由は、活発な意見交換によってのみ、そして多様な地域・歴史的条件下での多様な学

校の教師との広範な協力を通してのみ、新たに発生する数々の問題に関する望ましい明確さに到達することができるという確固たる信念を持っていたからであ

表 1：イエナ大学附属学校の改革の変遷と関連著作 (1924-1950年)

	主な出来事	ペーターゼンによる主な著作と論文
1924.	4年制の基礎学校としての実験学校の開始 (ヴォルフ(Hans Wolff)と21人の子どもが在籍) 学校・授業生活の調査と描写の開始	『一般教育科学』
1924.5.2.	第1回の保護者の集いを開催	
1925.	3つの基幹グループを持つ8年制国民学校に	『作業・生活共同体学校の原則に応じた基礎学校』(ヴォルフとの共著)
1926.	第1回の教育学週間を開催 ヴォルフ(1・3年生)、1925年に採用されたフェルチュ(Arno Förtsch)(4・6年生)とライグバート(Robert Reigbert)(7・8年生)が率いる3つのグループに69名の児童が在籍(3月)	
1926.2.10.	父母会としてFreundeskreisが誕生	
1926.7.1.	大学訓練学校(Universitäts-Übungsschule)という名称をイエナ大学学校(Universitätsschule Jena)に変更	
1926.10.26.	8年制を拡大することを省に申請するが失敗に終わる	
1927.8.	国際新教育連盟(International New Education Fellowship)第4回国際大会にて実験の成果を発表	『自由で一般的な国民学校イエナ・プラン』(7.31.)
1928.	テネシー州ジョージ・ビーボディ・カレッジに客員教授としてペーターゼン滞在(その間エルゼ(Else Müller-Petersen)が校長を務める)	
1929.	ゲリック(Ruth Gericke)がフランクフルトにてイエナ・プランに応じた学級の再編成を行う ヴィッテンベルクにある学校がイエナプランを導入	
1930.		『新教育の原則に応じた自由で一般的な国民学校の学校生活と授業』 『1925-1930年のイエナ大学附属学校の学校実験の中で創作された作品』(フェルチュとの共著)
1931.	ケーラー(Else Köhler)をイエナ大学へ招聘 「教育学的状況での心理学的研究」の共同研究チーム創立	『教育学の根源』
1932.2.24.	最初の教師記録が実施される	
1933.9.	最初の個人記録が実施される	
1933.10.3.	最初の全体記録が実施される	
1933/34.	Nimaschklebaにて村の学校の4年生と5年生をイエナ・プラン中級グループに(1年のみ)	
1934.	大学附属幼稚園(Fröbel-Kindergarten)設置	『イエナ・プランによる諸学校の実践』(ペーターゼン編集)
1935.		「国家社会主義の光の中のイエナ・プランの教育科学的基礎づけ」 「イエナ・プランに応じたグループ作業」
1936.	帝国教育省がイエナ・プランのさらなる広がりを禁じる	
1937.		『授業の指導論』
1939.9.	子ども宿舎(Kindertagesheim)設置	
1942.	教育科学研究所に幼児研究施設を併設	
1945.5.	イエナ大学一時閉鎖	
1945.夏	子ども宿舎閉鎖	
1945.10.	イエナ大学再開(社会教育学部長ペーターゼン～1948.10.15.)	
1946.	附属幼稚園閉鎖	
1947.7.	第25回の教育学週間を開催(最終)	
1949.		『小イエナ・プラン』に「イエナ・プランの成立史」を加筆
1950.8.1.	附属学校の閉鎖	

る。』²⁷と述べている。イエナ大学附属学校での実践が公開され、多くの人の目に触れ批判的に検証されることが、ペーターゼンの学校改革の試みにおいては重要であったのである。

中でも同書には第二部に1924/25年の年度報告が掲載されており、第1週（1924年4月28日-1924年5月5日）から第38週（1925年3月23日-1925年3月28日）のイエナ大学附属学校の様子が記述されている²⁸。報告の初めには「授業部屋は日の当たるところに置かれる。それには3つの大きな作業机、3脚の椅子、長いベンチ、2つの戸棚、1つの本棚、1つの小さな机が与えられる」²⁹という部屋の様子が残されている。第3週までは、第1週「共同体に、部屋に、作業道具に慣れること」、第2週「時間的・場所的秩序の中での生活」、第3週「作業リズムの形成」とそれぞれの週で取り組んだことがわかる。さらに第4週には暫定の授業計画案が掲載されており、そこでは第2週では各学年が週のどの時間で授業を行うのかのみが示されていたものが、何に取り組むのかの内容も含めて明記されている。

初日の様子を見ると、手洗い場や本棚にある本といった子どもたちが生活する空間に関する説明から始められている。さらに、2日後に入学となる1年生に対してどのような出し物をするかが話し合われており、子どもたちの意見の中から演劇をすることが決定している³⁰。「2人の妨害者（Störenfriede）（WilliとMartin）は何度も決議で（auf Beschluß）追い出される」³¹という記述からは、生活空間の秩序に関する子どもたちとの話し合いが、何らかの方法によってなされていることが推測される。しかしながら、「おお、ここはなんと素晴らしいことか！必要としているものを手に入れられるのだから。…ここでは望む時に絵を描くことができる。…まだ自分の番になっていないのだから、ここでは授業時間の半分は発言を求められない」という発言にたいして、教師ヴォルフは「このように子どもたちは、共同体を通しての結びつきをまだ知らない」と記しており、集団形成に向けての課題を感じていたことがわかる³²。

Ⅲ-2. 拡充期／展開期：諸学校への改革の伝播

1930年までに基盤が整えられることで、「1930年ごろからイエナ・プランは出生地を超えてより強く作用し始めた」³³とされるほどに、大学附属学校での取組は他の学校の改革へと展開した。早くは1929年から実践されていたイエナ大学附属学校外でのイエナ・プランの試みとして、大イエナ・プランの第3巻となる『イエナ・プランによる諸学校の実践（Die Praxis der Schulen nach Jena-Plan）』（1934年）では12本の報告

が寄せられている。他方で、イエナ大学附属学校では1931年のケーラー（Else Köhler, 1879-1940）のイエナ大学への招聘を皮切りに体系的な教育学的事実研究の取り組みが開始されており、イエナ大学附属学校にとっても研究的な拡充を果たした時期であった。

ここで2つのイエナ大学附属学校外での改革の事例を見てみる。リューベックにおいてイエナ・プランに応じた学校への転換を試みたピーパー（Hans Pieper）は1933年10月2-5日にイエナで開催された教育学週間への参加を通して自身の学校の改造を決意する³⁴。そこでの改革は、空間形成のためにふさわしい椅子や机を用意する外的改造（äußere Umgestaltung）と、グループ作業を中心としたカリキュラムの再編である内的転換（Innere Umstellung）が並行して着手され、1934年2月にはイエナの週作業案に応じて授業が進行された³⁵。さらにフィンスターヴァルデ共同体学校では、12人の教職員全員がイエナの教育学週間に参加し、そこでの授業参観と討論を通して学校全体を改造していく計画を立てた。年齢別学級の完全な解消や作業テンポと成績の個人化は直ちに実行することができずともしながらも、1930年の秋には従来の年齢別学級を異年齢による基幹集団に改編し、日と週のリズムから構成された作業計画に応じた学校生活を組織した³⁶。

さらにイエナ大学附属学校での研究もこの時期は注目に値する³⁷。1931年にイエナ大学に招聘されたケーラーは心理学者として「教育学的状況における心理学的研究」に取り組み、1932年からは1-3人の子どもを対象とした個人記録、教師の指導を対象とした教師記録、教師と子どもによる教育学的状況の全体を対象とした全体記録の3種類の記録によってイエナ大学附属学校内外で体系的に記録が取られた。この研究の積み重ねは、教育学的事実を対象とする研究による教育学の科学的自立に向けた発展、そして、学校の教育学的事実を明らかにすることによる学校改革への実践的寄与を果たすこととなる³⁸。

教育学的事実研究の記録と分析は、学校改革の中核的課題であった「授業の指導論」の提唱という形で結実する。「授業の指導論」は、教育学的状況（pädagogische Situation）を基底として、授業を組織し前もって準備することについて論じる授業の指導（Führung des Unterrichts）と、授業の中での教師のふるまいについて論じる授業における指導（Führung im Unterricht）という2つの指導観からなる。「授業の指導論」はペーターゼンがかねてより構想していた、知的陶冶のための教授の論としての教授学（Didaktik）を人格形成のための指導の論としての教導学（Hodegetik）から捉え直すという理論的要求を果たした成果であると同時に

に、学校改革の実践の成果として結実している点に特徴がある³⁹。

以上のように、この時期は途中でナチスによる国家社会主義的な政治体制へと転換するが、イエナ大学附属学校内での研究が停滞することはなかった⁴⁰。さらに、この間には幼稚園や子ども宿舎、幼児研究施設が併設されるといった施設の拡張も見られる。教育学的事実研究が創設期に見られるほどの教授組織の変革を産まなかった側面もあるが、教育学研究を発展させる研究学校としても実験学校としてもイエナ・プランは改革を進めることができていた。

Ⅲ-3. 閉鎖期：研究と改革の停滞と1991年の復活

ソビエト占領地区となった第二次世界大戦敗戦後には、イエナ大学の子ども宿舎や幼稚園は次々と閉鎖されることとなる。最終的にはペーターゼンの公職追放、大学附属学校もブルジョアの教育施設として閉鎖されることで26年間のイエナ大学附属学校での改革の試みは終了することとなった。この間にも閉鎖前年の1949年まではイエナ大学附属学校外を中心に教育学的事実研究は続けられ、教育学研究としての取組は継続されていた⁴¹。しかしながら、ペーターゼンはブレーメンでの国際大学の設立に関与する機会を得るも結果的にその試みが失敗するなど、西ドイツにも東ドイツにも足場を作ることができなかった⁴²。また、この間のイエナ大学附属学校の実践に関しては、ペーターゼンの著作においても詳細な記述が見られない。

イエナ大学附属学校での実験は1950年で幕を閉じるが、1991年にはイエナにイエナプランシューレ (Jenaplan-Schule Jena) が州立の実験学校として設立される⁴³。東西ドイツ統一前後のこの時期はペーターゼン論議 (Petersen-Debatte) の中心時期でもあり、イエナ・プランに対してもそれが民主的な学校モデルとしてふさわしくないのではないかという懐疑的な見解も提出された⁴⁴。しかしながら、新たにイエナに設立されたイエナプランシューレは、ペーターゼンの伝統を批判的に受容しながら今日でも独創的な実践を展開する学校として存在している⁴⁵。

Ⅳ. おわりに

本稿ではイエナ・プランの改革が1930年代以降は停滞していたとする言説に対して、イエナ・プランが他の諸学校を改革していくことを企図した試みであったということに着目し、イエナ・プランのおよそ26年間の変遷と時期ごとの特徴を描き直してきた。このことを通して、とりわけ1930年以降のイエナ・プランは、諸学校への展開という大学附属学校外にも、教育学

事実研究の本格化という大学附属学校内にも、実験学校としての重要な役割を果たしていたことが明らかとなった。さらに、イエナ大学附属学校の教授組織が変容され続けたわけではなかったが、教育学的事実研究を軸とした学校改革の試みは継続していたことが明らかとなった。

本研究の成果を踏まえ、歴史的なイエナ・プラン像を浮かび上がらせるために今後検討すべき点を3点挙げるができる。1点目はイエナ・プランの基盤となるペーターゼンの教育思想や教育科学構想への言及である。『一般教育科学 (Allgemeine Erziehungswissenschaft)』(1924年)の中でペーターゼンが論じた共同体 (Gemeinschaft) や人格 (Persönlichkeit) などの教育科学の基礎概念は、「人間がそれによって彼の個性 (Individualität) を人格にまで完成し得るような教育共同体をどのように創造すべきか」⁴⁶という学校改革の命題を形成している。これらの概念からイエナ・プランの実践や改革過程を捉える必要がある。2点目は教育学的事実研究による記録などの史料を用いた実証的研究である。当時のイエナ大学附属学校において、何がどのように記録され、それが学校改革のためにどのように活用されていたのかに迫ることで、イエナ・プランの学校改革の動力が明らかになることが期待できる。3点目は学校改革と教師教育の連動性である。ペーターゼンが大学附属学校の性格を「かつての訓練学校の意味ではなく、そうではなくて大学生にとっての観察対象として、また理論家の学校実践と学校生活全体との生き生きとした接触として」⁴⁷認識していたことを考慮するならば、いかに教育学的事実研究を軸としながら教師教育と学校改革を展開していたのかに論究することも、教育学研究と教師教育、学校改革の関係を問うための重要な側面となる。

【注】

- 1 三枝孝弘 (1984)「学校と授業の変革 解説」P. ペーターゼン著、三枝孝弘・山崎準二訳著『学校と授業の変革—小イエナ・プラン—』明治図書、18-19頁参照。
- 2 イエナ・プランは「イエナプラン」と表記されることもあるが、本稿では「イエナプランシューレ」などの固有名で用いる場合を除き、「イエナ・プラン」と表記する。
- 3 例えば、深沢広明 (1979)「イエナ・プランの教授学的検討—学級教授組織の史的展開—」中四国教育学会編『教育学研究紀要』第25巻、79-80頁や、熊井将太 (2017)『学級の教授学説史—近代における

学級教授の成立と展開— 溪水社, を参照。

- ⁴ 例えば, 三枝孝弘 (1958) 「ペテルゼン教育科学における〈信仰〉の位置について—イエナ・プランの基礎研究—」東京教育大学教育学部編『東京教育大学教育学部紀要』第4巻, 101-111頁や, 佐久間裕之(2015)「ペーターゼンのペスタロッター理解—「人間学校」(Menschenschule)の理念を軸に—」日本ペスタロッター・フレール学校編『人間教育の探究』第27号, 27-52頁, を参照。
- ⁵ 三枝 (1984) ではペーターゼンの生涯が時代順に記述されており, イエナ大学附属学校がそれぞれの政治体制のもとで何が生じていたのかを知ることができる (三枝 (1984), 前掲書, 14-27頁参照)。
- ⁶ この見方は, Benner/ Kemper (1991) が「ペーターゼン自身が国民共同体への奉仕の中で教育の観点に常に固執していた彼の計画を様々な時代に様々に解釈した」とするようなペーターゼンによる著作の記述によっても根拠づけられてきた (Benner, D./ Kemper, H.(1991): *Einführung zur Neuherausgabe des Kleinen Jena-Plan*. Beltz, Weinheim, S. 51)。
- ⁷ Schwan, T.(2018): “Wir sind weit davon entfernt zu meinen, den Weg gefunden zu haben” Über innovative und stagnative Phasen der Jenaplan-Pädagogik. In: Pädagogische Rundschau. 72. Jahrgang, Heft 4, Peter Lang, S. 485-506.
- ⁸ Vgl., Fauser, P., John, J., und Stutz, R.(Hrsg.) (2012): Peter Petersen und die Jenaplan-Pädagogik. Historische und aktuelle Perspektiven. Franz Steiner, Stuttgart, S. 8.
- ⁹ 同書はテノルト (Heinz-Elmar Tenorth) によって「ペーターゼンの伝記にとって, イエナの大学教育学にとって, そしてイエナプラン学校の実践にとって, この本は非常に生産的であり, 「これからペーターゼンやイエナプラン教育学を語ろうとする人は, この本に手を伸ばさなければならない」と評価されている (Tenorth, H.-E.(2013): Peter Fauser/ Jürgen John/Rüdiger Stutz (Hrsg.): Peter Petersen und die Jenaplan-Pädagogik. Historische und aktuelle Perspektiven. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2012. [Rezension]. In: *Zeitschrift für Pädagogik*. Jg. 59, H. 5, S. 784-787)。
- ¹⁰ Vgl., Fauser, P., John, J., und Stutz, R. (Hrsg.) (2012), *a. a. O.*, S. 9.
- ¹¹ Jürgen, J.(2012): “Eine Schule - ein Lehrerstand”. Lehrerbildung, Erziehungswissenschaftliche Anatal und Universitätsschule als Peter Petersens Jenaer Handlungsfelder 1923 bis 1933. In: Fauser, P., John,

J., und Stutz, R.(Hrsg.) (2012), *a. a. O.*, S. 77-160.

- ¹² このような見方は東西ドイツ統一前後のペーターゼン議論の中で提起された (Vgl., Schwan, T.(2000): Die “Kernzeit” der Petersen-Debatte in der bundesdeutschen Pädagogik 1989 bis 1992. Prolegomena zu einer historischen Verortung. In: Pädagogische Rundschau. Jg. 54, H. 3, S. 285-303)。
- ¹³ Fauser P.(2012): Eine demokratische Schule? Die Universitätsschule Jena in ihrer Weimarer Gründungszeit. Versuch einer demokratiepädagogischen Qualitätsanalyse ihrer Praxis. In: Fauser, P., John, J., und Stutz, R.(Hrsg.), *a. a. O.*, S. 161-226.
- ¹⁴ Harten, H.-C.(2012): Petersen und der Nationalsozialismus. SS-nahe akademische Netzwerke der Erziehungswissenschaft. In: Fauser, P., John, J., und Stutz, R.(Hrsg.), *a. a. O.*, S. 251-289.
- ¹⁵ Retter, H.(2012): Zur Diskussion um die Universitätsschule Jena im Nationalsozialismus. In: Fauser, P., John, J., und Stutz, R.(Hrsg.), *a. a. O.*, S. 291-336.
- ¹⁶ Bartuschka, M.(2012): Die “Petersenpläne” für Jena, Halle und Bremen - eine Zeit der unbegrenzten Hoffnungen nach 1945. In: Fauser, P., John, J., und Stutz, R.(Hrsg.), *a. a. O.*, S. 385-408.
- ¹⁷ Lütgert, W.(2012): Die Rezeption des Jenaplans und der Petersen-Pädagogik in der Bundesrepublik zwischen 1952 und 1990. In: Fauser, P., John, J., und Stutz, R.(Hrsg.), *a. a. O.*, S. 409-426.
- ¹⁸ John, J./ Retzar, M./ Stutz, R.(2012): Jenaplan-Renaissance, Petersen-Ehrung und Schulgründung 1990/91 in Jena. In: Fauser, P., John, J., und Stutz, R.(Hrsg.), *a. a. O.*, S. 427-459.
- ¹⁹ ペーターゼンとイエナ・プランに対する評価はイエナという場にとっても重要である。2009年にオルトマイヤー (Benjamin Ortmeyer) によって刊行された著作は, ペーターゼンが反ユダヤ主義で人種差別主義者であったことを明らかにした。この著作で明らかにされたことは, イエナの記憶文化には人種差別主義者の場所はあるべきでないということから, イエナの Petersenplatz の名称を変更すべきだという要求を立ち上げた。2011年3月16日, イエナ市議会は, 多数決により Petersenplatz の名前を変更することを決定し, 2011年3月22日, イエナ市の文化委員会は過半数の投票により, Petersenplatz の新しい名前は Jenaplanplatz になることが決定した (Retter, H.(2020): The dispute over the reform

- pedagogue Peter Petersen(1884-1952) in Jena 2010. Review of a „total disaster“ after ten years. In: International Dialogue on Education. 7(1), pp. 54-90).
- ²⁰ Vgl., Schwan, T.(2018), a. a. O., S. 492-495.『教育学 (Pädagogik)』(1932年)においてペーターゼンは、合理主義的な観念論に基づく従来の教育学を「幻想 (Illusion)」であるとし、「幻想なき教育科学」に基づいて教育学を立ち上げていく「教育学的現実主義 (pädagogische Realismus)」の立場を確立している。
- ²¹ Vgl., Petersen, P.(1927): Der Jena-Plan einer freinen allgemeinen Volksschule. Beltz, Langensalza.
- ²² Petersen, P.(Hrsg.)(1930): *Schulleben und Unterricht einer freien allgemeinen Volksschule nach den Grundsätzen neuer Erziehung*. Hermann Böhlhaus Nachfolger, Weimar. S. V.
- ²³ P. ペーターゼン著, 三枝孝弘・山崎準二訳著 (1984), 前掲書, 179頁参照。
- ²⁴ Vgl., Petersen, P., Wolff, H.(Hrsg.)(1925): Eine Grundschule nach den Grundsätzen der Arbeits- und Lebensgemeinschaftsschulen. Hermann Böhlhaus Nachfolger, Weimar, S. 4.
- ²⁵ それまでは前任者であるライン (Wilhelm Rein, 1847-1929) の時代の大学訓練学校 (Universitäts-Übungsschule) という名称であった。
- ²⁶ 「訪問は、わずかな例外を除いて、少なくとも3日間の滞在と、訪問者が批判的な報告を書いて学校長に送ることを条件にしか認められていない。私たちはこれらの報告から多くを学び、訪問者が与えてくれた励ましに心から感謝しなければならない。」(ebd., S. VII) とされている。
- ²⁷ Ebd., S. 6-7.
- ²⁸ 第3週 (1924年5月12-17日) までは毎日記録がとられており、第4週 (1924年5月19-24日) 以降は週の報告と言う形でまとめられている。
- ²⁹ Ebd., S. 55.
- ³⁰ Vgl., ebd., S. 56.
- ³¹ Ebd.
- ³² Ebd., S. 57. この点に関して、5週目では「彼女ら (子どもたち - 註: 引用者) は個々の場合で自身からすでに、私たちのグループの円座に対する妨害を引き出すということに達する。最近ではある種の統一感の始まりが少しずつ出てきている」(ebd., S. 78) とあり、集団としての成長に対する見取りが見られる。さらに今後の観察点として、子どもたちの中にはどのようなグループがあるのか? このグループは永久的同志 (Dauerkameradschaft) であるのか、それともそれぞれの従事することに応じて変化する傾向のある作業共同体であるのか? 子どもたちの共同生活はどのように本質的な価値のある生活 (Eigen-Wertleben) を得られ得るのか? といった問いが記録されている (vgl., ebd., S. 79)。
- ³³ Petersen, P.(Hrsg.)(1934): Die Praxis der Schulen nach Jena-Plan. Hermann Böhlhaus Nachfolger, Weimar, S. VI .
- ³⁴ Vgl., Pieper, H.(1934): Bericht über die Umstellung der Schule Espelkamp II nach dem Jena-Plan., In: Petersen, P.(Hrsg.), a. a. O., S. 360.
- ³⁵ Vgl., ebd., S. 360-367.
- ³⁶ Vgl., ebd., S. 230.
- ³⁷ 教育学的事実研究の発展過程はディートリッヒ (Theo Dietrich) によって以下のように特徴づけられている。すなわち、第1段階: 学校生活の経過に関する記録 (1924年以降)、第2段階: 子どもそれぞれが研究の対象となる (1928年以降)、第3段階: ケーラーによる「教育学的状况における心理学的研究」における個々の子供の観察 (1931年以降)、第4段階: 関心は再び第1段階に戻り、授業研究として発展した (1936年以降) (vgl., Dietrich, T.(1986, 1952): *Die Pädagogik Peter Petersens. Der Jena-Plan: Modell einer humanen Schule*. Klinkhardt, Bad Heilbrunn, S. 95-96)。他方で、ペーターゼンの妻であるエルゼ・ミュラー・ペーターゼン (Else Müller Petersen) は以下の6つの研究段階で特徴づけている。すなわち、第1段階: 「教育学的事実」概念の第一の登場 (1924-31年)、第2段階: エルゼ・ケーラーとペーター・ペーターゼンの「教育学的状况」における心理学的研究 (1931-1934年)、第3段階: イエナ大学附属学校とイエナ大学附属幼稚園における本来的な教育学的事実研究 (1932-1946年)、第4段階: 他の学校への教育学的事実研究の拡張 (1935-1961年)、第5段階: 一斉授業における教育学的事実研究 (1950-1953年)、第6段階: 「教育学的基础研究」のための教育学的事実研究の利用 (1947年~) である (vgl., Petersen, P. und Petersen, E.-M.(Autor), Rutt, T.(Hrsg.)(1965): *Peter und Else Petersen. Die Pädagogische Tatsachenforschung*. Ferdinand Schöningh, Paderborn, S. 252-257)。
- ³⁸ ペーターゼンは教育学的事実研究の学校改革についての意義を目の前の教育学的事実や当該の学校が有する規範の解明にみる。すなわち、「それ (教育学的事実 - 註: 引用者) は当該の学校モデルの規範 (Norm) に結び付けられている。そのためにこの、

規範が研究過程で明らかにされなければならない」(Dietrich, (1986), *a. a. O.*, S. 97) のであり、イエナ大学附属学校の事実由来するイエナ大学附属学校における「規範」が重要となる。このことは、イエナ・プランが展開するということが、イエナ大学附属学校における「規範」を他の学校に取り入れることを意味するのではないことを示している。

³⁹ ペーターゼンにとって『指導論』(『授業の指導論』—註: 引用者)はとりわけ10年制の国民学校の中で新たな学校作業の基盤を手に入れるために実施された16年間の不断で実践的な試みの成果」(Petersen, P.(1937): *Führungslehre des Unterrichts*. Beltz, Langensalza, S. 5) である。この16年間は1924年からの大学附属学校における実践期間のみではなく、1920年のリヒトヴァルク学校就任からの実践経験を含んだ1920-1936年を指していると思われる。

⁴⁰ 他方で、1936年には帝国教育省によってイエナ・プランの更なる拡大が禁止されるなど、国家社会主義下においてもイエナ・プランの発展に対して何ら障害が発生していなかったわけではない (vgl. Retter, H.(2018): Peter Petersens pädagogischer Reformimpuls. In: Barz, H.(Hrsg.): *Handbuch Bildungsreform und Reformpädagogik*. Springer VS, Wiesbaden, S. 199)。それゆえに、何年までをイエナ・プランの学校改革の発展期と捉えるのかの区分にはいくつかの可能性がある。

⁴¹ 1950年までに483の個人記録、28の教師記録、258の全体記録が蓄積された (vgl. Petersen, P.(1951): *Eigenständige (autonome) Erziehungswissenschaft und Jenaplan. Im Dienst der Pädagogischen Tatsachenforschung und der Lehrerbildung*. Kaiser, München, S. 16)。

⁴² Vgl. Fauser, P., John, J., und Stutz, R.(Hrsg.) (2012), *a. a. O.*, S. 21

⁴³ しかしながら、イエナ外では、1953年にはケルンのローゼンマル校でイエナ・プランによる学級編成がなされ、1959年にはオランダでのイエナ・プラン発展の立役者となるフロイデンタール (Susan Freudenthal-Lutter, 1908-1986) が同校を訪問する

など、早期からイエナ・プランの実践は復活を果たしていた。

⁴⁴ Vgl. Schwan (2000), *a. a. O.*

⁴⁵ イエナのイエナプランシュレのホームページには「ペーターゼン議論」のページが用意されており、2009年の同校校長ヨーン (Gisela John) によって、ペーターゼンが取り組んだイエナ・プランとの異同が説明されている。すなわち、①才能や社会的背景に関わらず全ての子どもに開かれた学校、②個々の学習進度に応じて自由に集団形成しながら学習を進めるグループ授業方式 (gruppenunterrichtliche Verfahren)、③子どもの学習過程に即した評価という3点でペーターゼンの構想を継承するのであり、①教育を陶冶に優先させる学習観、②指導者 (Führer) や民族 (Volk) に結びついた共同体観、③子どもの中にリーダーを認める「子どもリーダー (Führer-Kind)」、④共同体と社会を切り離して捉える見方という4点でペーターゼンの構想を退けるのである (Jenaplan-Schule (2019). *Jenaplan-schule Jena. Staatliche Gemeinschaftsschule*. <https://jenaplanschule.jenade.wordpress/> [access: 2021/6/10].) 「垣根を越えて見る」はビーレフェルト実験学校が創設メンバーの一員となって1989年に結成された改革教育のための学校連合 (Schulverbund) である。同校は2004年には「下から」の教育改革を志向する「垣根を越えて見る (Blick über den Zaun)」に加盟し、他の学校と連携しながら「下から」の学校改革の取組を継続している。

⁴⁶ Petersen, P. (1962, 1924): *Allgemeine Erziehungswissenschaft*. Walter de Gruyter, Berlin, S. 107.

⁴⁷ Petersen, P. (1926): Die akademische Lehrerbildung an der Universität Jena. In: *Schulreform*. Jg. 5, S. 53.

(主任指導教員 吉田成章)

【付記】

本研究はJSPS 科研費 JP21J13613の助成を受けたものである。